

氏 名(本 籍)	ふくしまおさみ 福 島 脩 美 (東 京 都)
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 923 号
学位授与年月日	平成 5 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	行動調整機能としての自己評価に関する実証的研究
主 査	筑波大学教授 原 野 広太郎
副 査	筑波大学教授 高 野 清 純
副 査	筑波大学助教授 吉 田 富二雄
副 査	筑波大学教授 中 野 良 顕
副 査	筑波大学助教授 前 川 久 男
副 査	筑波大学助教授 松 村 和 則

論 文 の 要 旨

本論文は自己強化に認知的活動を組み込む手続を用いて、自己評価の行動調整機能の機制を実証しようとした。さらにこの研究結果に基づいて自己調整を教育指導実践や教育相談臨床に適用できる可能性について検証しようとした。

本研究は次の五部12章から成っている。

第一部 理論的研究

第 1 章 自己評価の機能に関する研究

第 2 章 自己強化の認知的解釈と本研究の目的

第二部 自己評価の行動調整機能に関する実験的研究

第 3 章 自己評価による行動調整過程に関する研究

第 4 章 強化・評価条件による課題への取組態度の研究

第 5 章 自己評価による押圧調整行動の研究

第三部 自己評価基準の獲得過程に関する研究

第 6 章 モデルの遂行と自己評価、他者評価の観察効果

第 7 章 日常場面に近い事態での自己評価のモデリング

第 8 章 モデルの遂行－評価事態に関する観察者の認知

第四部 自己評価の機能に関する教育実践的研究

第9章 書字学習における自己評価手続の効果

第10章 臨床指導における自己評価の位置

第五部 本研究のまとめと総合的考察

第11章 本研究の要約

第12章 総合的考察と結論

以下に各部と各章の概要を述べる。

第一部は研究の理論的背景と目的について報告した。

第1章は、自己評価の調整機能を研究する糸口として、自己強化に関する実験的研究を展望し、研究上の課題を指摘した。

第2章は強化理論と社会的学習（認知）理論を比較し、強化理論の枠組を越えて、主体的、認知的、内潜在的な過程に注目することの意義について論じ、自己強化と自己評価の概念的関係について整理した。

第二部は大学生を被験者とする3つの実験によって、自己評価による行動調整の過程とその機能について基礎的な検証研究を行った。

第3章はスマートボール・ゲームのレリーサーの長さとし方を調整して球を中央のコースに導く課題で、厳格自己評価による自己強化手続、寛大自己評価による自己強化手続、外的強化条件（実験者による評価・強化）、及び評価・強化手続のない統制群を設け、3つの従属変数を観測した。

その結果、①正反応増大は厳格自己評価による自己強化条件がもっとも顕著で、次いで寛大自己評価に基づく自己強化条件、他者評価による外的強化条件であり、統制群の学習効果は認められなかった。②反応がある一定の値に集まる度合で収斂をみると、ブロックを重ねるにつれて厳格自己評価による自己強化群が顕著であった。③反応－自己強化－反応の系列分析では、正反応（+）を自己強化（SR）して次に再び正反応（+）を導く型（+SR+）よりも、誤反応（-）を自己強化せず（NR）に次の反応を正反応（+）にする型（-NR+）が全体に高頻度で、かつ後半のブロックで顕著であった。

第4章は3章と同じ実験装置と条件下で取組態度に関する一組の質問への回答を求めた結果、厳格自己評価による自己強化条件の被験者がもっとも動機づけが強く、また自己評価は行動を自分なりに決めて維持する方略を、他者評価は行動をいろいろ変える方略を導くことが明らかになった。

第5章では自己評価による行動調整過程をいっそう単純化し、反応と評価を時間的に接近させ、調整過程を連続記録するため特別に作製された指押圧調整記録器を用いた。各押圧調整行動に対する評価は over, just, under の3段階で、実験者から評価情報を与えられる外的評価条件、自己評価を口に出すという外顯的自己評価条件、自己評価を心で行うよう教示される内潜在的自己評価条件を設定し、その効果を比較した結果、内潜在的自己評価条件でのみプリテストからポストテストへの有意な遂行上昇が認められた。

以上の研究結果から、自己評価の行動調整機能が実証されたといえる。

第三部は自己評価の基準獲得過程に関する3つの研究から成っている。評価様式が観察によって獲得される過程を子どもを被験者として実証しようとした。

第6章では符号置換による計算を課題として、モデルが遂行を自己評価する事態と他者から評価される事態を設定し、観察後の被験者の遂行と評価基準を観測した結果、自己評価も他者評価も、肯定的評価の示範は観察者の肯定的自己評価を、否定的評価の示範は否定的自己評価を喚起するが、モデルの自己評価は他者評価よりも自己の行動に対応した弁別的自己評価を観察者に喚起した。

第7章は、加算の遂行を課題として日常生活に近い事態でモデルの遂行水準と自己評価の組合せ効果を検討し、モデルの高遂行水準を観察した被験者は肯定的自己評価を全般に低く抑制することがみいだされた。

第8章は、モデルの自己評価と他者評価が観察者にどう認知されるかを興味と意欲の点から検討した結果、自己評価も他者評価も正の評価は興味を増し、負の評価は興味を失うものと認知されるが、意欲の面では、負の他者評価が意欲を失わせ、負の自己評価がむしろ意欲を高めるものと認知され、自己評価に他者評価とは異なる動機づけ効果が認められた。

第四部は教育実践における自己評価の活用に関する2つの研究を報告した。

第9章は漢字練習における自己評価の効果を検討した結果、自己評価は丁寧な書字行動を喚起し、誤字を少なくすることが認められた。

第10章は子どもの自己目標―遂行―自己評価の過程を父母がバックアップするシステムにより自発的行動の促進に成功した教育相談臨床事例を通して、臨床事例の理解と指導における自己評価の機能化の意義を考察した。

第五部の第11章と第12章で、本研究のまとめと総合的考察を行い、①自己評価は課題への対処方略と認知的自己動機づけを促進することによって行動調整機能を果たし、学習を促進する、②自己評価の観察は遂行に評価基準を与え、モデルの自己評価は他者評価よりも適切な自己評価を喚起する、③そして自己評価は不適応理解と適応回復援助の重要な観点となり得る、と結論した。

審 査 の 要 旨

本研究は著者の長年にわたる一連の研究によって、自己評価の行動調整機能の機序を実証し、その知見を教育実践と教育相談臨床に展開したものであり、着実な研究の構成と実証的態度は高く評価することができる。

先に上げたいいくつかの自己評価の研究成果はそれが高く評価されるとともに、後の研究にも大きな影響を与え、多くの論文に引用されている。

本論文は被験者のコントロールなど実験手続上の若干の工夫は残されているが、全般的には高い水準の研究として評価されるとともに、教育実践への適用の道を開く有意義な実践的研究として高く評価される。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。